

日本全国
俳人叢書

158

岡野
等集—海
猫

日本全国俳人叢書 第158集

うみ ねこ
〈海 猫〉

一九九一年六月三〇日 発行

定価 一八〇〇円

(本体一七四八円)

著 者

岡 野 等

発行者

福 澤 英 敏

印 刷

日本図書刊行会
印刷部

発行所

〒112 東京都文京区
目白台二―三二

(株)近代文藝社

電 話

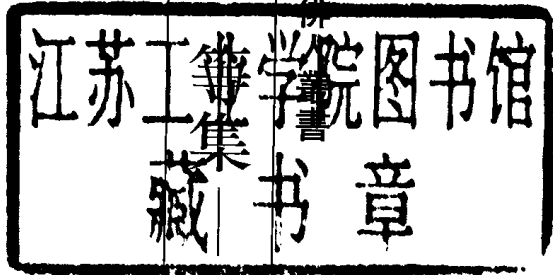
03三九四二一〇八六九

振替口座

東京七・六八八七五

日本全国
併
立
学
校
图
书
馆

岡野



海
猫

目次

年譜／あとがき	冬	秋	夏	春
				
	69	49	26	5

春

時
候

海猫のこゑ乗せ春の渡りくる

春の息枯れしものより湧き上る

テッシューパーに香水春の湧くごとし

楽しみて稿書く春となりにけり

朝 闌^た けて 春 流れ 出 づ 雪 の 底

こ の 春 は 胸 の ひ と り の 嫁 ぐ 春

早 春 の 湖 の 陽 に 乗 り 鴨 進 む

春 曙 目 覚 め 早 き を か な し め り

寝足りしに春曉どこか疲れをり

天文

飛行雲吸ひこむ春の空円く

干支還る天に朧の北斗星

春星へ雲は褥を拡げゆく

春星は一つのみ子の誕生日

風光る紅刷きそめし少女ゐて

風光る風を跳ねゆく膝小僧

黄のシューズ一人が交り風光る

一病のむずかるごとし春嵐

春雨に濡れて老斑殖えゆくや

掌にうけて雨よりぬくし春の雪

鳥雲夕餉の煙か島に立つ

地理

富士晴れて蹠に弾む春の土

子の投げし白球乗せよ春の波

底の石息づき春の水流る

春の坂蹠ききし人と知りて待つ

溪流へ声あげ白き雪解水

流水の白光を衝き海猫渡る

海猫渡る流水沖にとどろかし

流水に陽上る焰したたらし

流水の溶けるさざめき光りあふ

生活

草の餅息合ふ夫婦の杵と臼

桜餅名のみ変らぬ町に買ふ

齒ぎれよき朝の喫茶の新社員

行事

年ごとに若くなりゆく内裏雛

親王雛眉目月日を刻むなく

夜の地震な雛ゐの親王座をくづす

雛もたぬ日を憶ひをり雛の夜

一夜明け雛は目はらすこともなく

雛寿司ととのえゆけり目口鼻

寄り添うていとけなかりき雛寿司

雛寿司飾る間もなく食われけり

雛寿司女雛ひとつが残さるる

義士祭大きく見ゆる内蔵助

やわ肌を主税は知らず桜散る

義士祭香一束を吉良に焚く

伝言の一語になごむ万愚節

彼岸会や亡妻の仕種に燭供ふ

母の忌や蕨たたきという料理

動物

潮音はあらず勿来の昼蛙